

2019年横浜ナザレン教会復活節第六主日礼拝
「恵みの刻印」ローマ書5:1～11(口語訳)

【聖書箇所】

ローマ書 5:1 このように、わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている。2 わたしたちは、さらに彼により、いま立っているこの恵みに信仰によって導き入れられ、そして、神の栄光にあずかる希望をもって喜んでいる。3 それだけではなく、患難をも喜んでいる。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、4 忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを、知っているからである。5 そして、希望は失望に終ることはない。なぜなら、わたしたちに賜わっている聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからである。6 わたしたちがまだ弱かったころ、キリストは、時いたって、不信心な者たちのために死んで下さったのである。7 正しい人のために死ぬ者は、ほとんどいないであろう。善人のためには、進んで死ぬ者もあるいはいるであろう。8 しかし、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである。9 わたしたちは、キリストの血によって今は義とされているのだから、なおさら、彼によって神の怒りから救われるであろう。10 もし、わたしたちが敵であった時でさえ、御子の死によって神との和解を受けたとすれば、和解を受けている今は、なおさら、彼のいのちによって救われるであろう。11 そればかりではなく、わたしたちは、今や和解を得させて下さったわたしたちの主イエス・キリストによって、神を喜ぶのである。

1 聖書の中で最も愛された箇所

今日の聖書テキスト、ローマ書第五章前半は、多くの人々に愛され続けています。ある方は、この聖書テキストを「生活に食い込んでくるテキスト」だと言いました。生活の中でいろんな問題に突き当たり、悩んでいる人の傍らにあって力を与える聖書の言葉だということです。また別の方は、「聖書の語る救いとは何か?というのがここに凝縮している」と言いました。「極端なことを言えば、他の聖書の部分がなくなり、ここだけになってしまったとしても、父なる神がキリスト・イエスを通じて与えて下さる救いとはどのようなものかがわかる」というのです。

今日は、そんなテキストを口語訳で見ていきたいと思えます。というのも、口語訳の方が、ローマ信徒への手紙の作者と言われるパウロの息遣いが聞こえるような訳に思えるからです。パウロは目が悪かったと言われていました。ですから、このローマ信徒への手紙は、パウロが話す言葉を弟子たちが書いた、口述筆記による手紙だと言われていました。それも今のように、パソコンでパウロが言っているはしからタイプしていく…なんてことはできません。全て手書き

です。パウロはゆっくりと語ったことでしょう。目をつぶって語っていたのではないかと思います。主イエスが教会を迫害していた自分にもご自身を示し出会ってくださったこと、罪を赦し救ってくださったこと、そして伝道者とされ様々苦難の中にあっても必ず助けてくださった、パウロ自身を支え導き担ってくださるイエス様との出来事を振り返りつつ、一言一言噛み締めるようにゆっくりと語るパウロ。ですが時には話しているうちに新たな恵みを発見し、喜びや驚きで興奮した口調になったこともあったでしょう。この聖書テキストからは、そのような口調の乱れが感じられるのです。あるイギリスの聖書学者は、「ここでパウロは喜びの叫びをあげている」と言ったそうです。そういうパウロの喜びの叫びを口語訳の方がよりの確に映しているように思います。私達も、パウロの言葉に耳を傾けつつ、それぞれの人生の困難の意味を考えていきたいと思えます。

2 今立っているこの恵み

そのパウロの叫びが聞こえてきそうなのが、2節、「いま立っているこの恵み」という言葉です。今立っている、今自分がそこにたたせられている恵みの事実を語らずにはおれないパウロがいます。もっと原文に忠実に訳せば、「今立っているこの恵みに入る入口を今自分は手にいれている」と訳せる文章です。矛盾した言い方です。「今立っているこの恵みに入る入口を今自分は手にいれている」一方ではもう自分は恵みの中に立っていると言います。しかし、同時にその恵みに入っていく入口を見つけた！とパウロは叫んでいるのですから。それは、「今も恵みのうちに立たされている。しかし、今の恵みよりも更に大きい、更に深い恵みの入口を今自分は見つけたのだ！」というパウロの驚きと喜びを表現する言葉と考えることができるでしょう。そして、私達の前にもドアがあります。更なる恵みへのドアです。そのドアを私達はパウロと共に開けようとしています。

3 信仰義認による平和

そんな恵みの内容を見事に言い表したのが、1節の言葉です。「このように、わたしたちは、信仰によって義とされたのだから、わたしたちの主イエス・キリストにより、神に対して平和を得ている。」。私達が神から頂く救いはいろんな言葉で表現されます。それを、パウロは、「神によって義とされることだ」と語り続けました。つまり、神に正しい人間だと認められることが私達の救いだということです。ある方は、これを、「神と正しいおつきあいに入ること」と言いました。絶妙な言い方だと思います。「正しいおつきあい」、つまり、神と私達の間には平和な関係が生まれるということです。

4 自分との間の不和

神との間に平和を得るということは、自分に対する平和を得るという事でもあると思います。私達が最も辛く感じることのひとつに、自分で自分を受け入れられない事があるのではないのでしょうか。私達はしばしば自分との間が不和となるのです。受け入れられないのが他人であれば、その人の存在を自分の中から追い出す事もできます。しかし、自分であればそうはいきません。自分の環境を受け入れることができない、自分の能力のなさを受け入れることができない…。別の場合もあります。自分は今までそれなりに頑張ってきたのに、どうしてこんな運命にさらされるのか？それを受け入れる事ができない。そうすると私達、不機嫌になります。家族や親しい人に八つ当たりをします。パウロはまさにそんな苦しい状況の中で、自分が神に受け入れられることを知る喜びを語ります。神との平和とは、神が自分を受け入れてくださった…という事にほかなりません。自分で自分を受け入れられなくても、神は受け入れて愛してくださっています。

5 神の愛

神が私達を受け入れて下さるとは、当たり前のことではありません。ひとえに一方的な神の愛ゆえです。人の愛は、ふさわしい者しか愛さない愛でしょう。無償の愛というのは、自分と親しい人間にしか注げないものです。ですが、神の愛はふさわしくない者に注がれる愛です。私達の愛とは根本的に異なるのです。「しかし、まだ罪人であった時、わたしたちのためにキリストが死んで下さったことによって、神はわたしたちに対する愛を示されたのである。」とあるとおり。聖書の福音はここに凝縮しているとも言えます。

その愛になんらふさわしくない者を愛する神。言い方を変えれば、「あなたがどうであろうとも、あなたは、かけがえの尊い存在であり、滅びてよい者ではない。どうか私のもとへ来なさい。」と人間を招き続けるのが聖書の神です。しかし、私達はその神を無視し続けました。神とはなんの関係もなく生きていこうとして、神と敵対しました。ですが、神は、敵対する私達のために、ご自身のひとり子であるイエス様をこの地上にお送りになりました。イエス様は、神の敵である私達の罪を償うために、十字架の上に血を流し、肉を裂いてくださったのです。それは、父なる神から私達に差し出された和解のメッセージとも言えます。神の方から私達に差し出された握手の手です。その手を私達が握り返すとき、ご自身が最も愛する御子を差し出すほどに私達を愛されていることを実感するのです。握り返すこととは、神が差し出された主イエス・キリストの十字架を自分のためだと受け入れること。そうして初めて、神と私達は仲直りできます。

「自分で自分を愛せなくとも、神さまが私を心から愛してくださる。」自分自身でさえも受け入れられない者を受け入れ愛してくださる神がいらっしゃる。そう実感できるのは大きな喜びです。この喜びは、自分だけを喜ぶ喜びではありません。まさにこの喜びは、神の愛を喜び、神に受け入れられる自分を喜ぶ喜びです。

6 苦難

そして、パウロは、「それだけではなく、患難をも喜んでいいる。」と続けます。艱難とは大きな苦難のこと。人生の荒波は、ときに激しく大きく深いもの。私達は波間に漂う小舟のようです。苦しみ悩みという高波に呑み込まれ、絶望という海底に沈んでしまいそうになります。それは信仰者であろうとなかろうと同じです。私達はよく「キリスト者になったからと言って悩みも全てなくなるということはない。依然として悩みはある」と言います。しかし、それは正確な表現ではないでしょう。キリスト者となれば、「イエス・キリストを知ったが故の悩み」が増えるのです。イエス・キリストを知らなければ、「敵を愛さなくてはならない」と思うことはありません。「敵なんだから憎んで当然」と生きていけます。「人を裁いてはいけない」とも考えない。悪いことをした人を非難し裁くことは当然だと思って生きていけます。葛藤はありません。しかし、イエス・キリストを通じて神の愛を知った以上、イエスさまの教えを守れない自分に苦しむこととなります。敵を愛せない自分、人を裁かざるを得ない自分との闘いが始まるからです。

そんな苦しみが大きいと、私達は容易に神を見失うのです。辛い事が続くと、神の愛が信じられなくなるのです。自分から主イエスの手を振りほどいてしまいます。聖書の御言葉を読まなくなります、祈らなくなります、神を叫び求めなくなるのです。今まで立っていた、恵みから離れてしまうこと度々なのです。

7 足腰の強い信仰

それは足腰の弱い信仰と言えます。折角、イエス・キリストの十字架と復活によって与えられた恵みの中に立ち続けることができません。これは、信仰者個人の問題というよりも、教会の問題ではないかと思えます。教会の教えが、私達の人生の諸問題に打ち勝つたたかさ、強さを持っていない、イエス・キリストの福音の恵みを絵に書いた餅にしてしまって、現実的な力を持たないから、信仰者の信仰もそうならざるを得ないのではないかと思えます。「人間なんだから敵は愛せない」と開き直るか、尚悪いことに、敵を愛せない自分たちの現実から目を背けて、「聖められた私達は敵を愛せます」と綺麗事で済まそうとする—そういう教会の現実があります。神に対して叫びをあげ、敵を愛そうとすることを願い求めようとはしない、「悩まない」教会の姿です。

どちらも自分たちが変わらずに済まそうとして、教会から反対者を排斥し、悩みから逃げてしまうことをよしとします。教会の信仰が成熟せず足腰が弱いままですから、信仰者の現実に打ち勝つ教えを語りえないのだらうと思うのです。先ほど、「恵みの中に立つ」という話をしましたが、恵みの中に立ち続ける、座り込まない、それには足腰の強さが必要なのです。パウロが「それだけではなく、患難をも喜んでいる。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを、知っているから」と言うのは、まさに恵みの中に立ち続ける足腰の強い信仰の姿です。神は私達がこのような本当に足腰の強い、恵みの中に立ち続けることができるようになって欲しいと私達に悩み苦しみを与えておられるのかもしれない。

8 苦難と忍耐

横浜教会の週報には、「黙想の言葉」として、カトリック六甲教会の司祭であるバレンタイン・デ・スーサの言葉を載せています。彼の言葉の中には、生活に役立つ福音の言葉が多いからです。その中でも私のお気に入り、今日の週報にもあります「売り言葉に買い言葉で、人を傷つけないように。相手が受け入れないとき、言葉は無駄です。忍耐して沈黙しましょう。忍耐とは心の力を使うこと。我慢とは違います。」この言葉が好きなのは、私がとても怒りっぽいからかもしれません。かくありたいと願っているのです。それはさておき、今日、この言葉を引用したのは、後半です。「忍耐とは心の力を使うこと。我慢とは違います。」です。忍耐と我慢、どう違うのでしょうか。我慢の「慢」は、欲しいまま、気まま、わがままの意味がある漢字。もともと、「我慢」という単語は、高慢と同じく「自分をえらく思い、他を軽んずること」という意味がありました。つまり、「苦難を我慢する」ことは、苦難にあっても自分を変えず自分自身を拠り所に乗り切る事のようにです。

一方、忍耐は、耐え忍ぶこと。じっと辛抱すること。新約聖書では「希望」と共に語られることが多い言葉です。なぜでしょうか。自分の中に希望があるということでしょうか。違うと思います。優秀で信仰深い自分に希望をおいて苦難を乗り切ることと忍耐は違うのではないかと思います。「忍耐」とは、自分を開いて、自分を変えていくことで苦難を乗り切ることではないかと私は考えます。自分を大きくして乗り切る我慢とは異なり、忍耐は、自分を小さくして耐えることではないかと思います。何に対して自分を開くのか、何に対して自分を小さくするのか？ イエス・キリストと神に対してです。神とキリストに対して自分の心を開き、神とキリストに対して自分を小さくすることは、自分を変えて頂くことにつながります。

9 錬達

忍耐とは、神によって自分を変えて頂くこと。それは、「**忍耐は練達をうみだす**」と訳されている言葉からもわかります。昨年の12月に出た新しい翻訳、協会共同訳では、「練達」にあたるギリシャ語は「品格」と訳されています。英語版聖書では、“character”という単語が使われています。この”character”の語源は、ラテン語で「刻印」という意味がある言葉です。ですから、「忍耐は練達をうむ」という一文は、「忍耐するとは、私達に刻印が押される」ということになります。

どういう刻印でしょうか？イエス・キリストの刻印です。恵みの刻印です。私達は、忍耐してイエス・キリストの刻印を神から押される者となるのです。私達はキリスト者となったからと言って、それまでの性格ががらりと変わるわけではありません。私が私でなくなるわけではありません。せっかちな人もいれば、おっとりした人もいます。どちらかというとも明るい人もいれば物静かな人もいます。皆それぞれに異なった性格を持っています。けれどもその性格のどれにも、主イエス・キリストの愛という刻印が押されているのです。キリストの愛が刻まれ、聖められるのです。キリストの恵みの刻印を受けることで、その人の性格が神から与えられた性格 character として、新しく息づき始める、新しく輝き始める…とも言えます。

あるイギリスの聖書学者が、「艱難から忍耐、忍耐から練達、練達から希望へいたる歩」を、神の愛が、或いは、私達が神から愛されるということが、私達の存在の中核になる歩だと言いました。私達の中核になるもの、私達の中の「わたし」と呼ばれる者が新しくなる歩だということです。それはこうも言い換えられています。「あなたはどのようにしてそんなことをするのですか」という問いにこう答えることができるようになるということ。「それは、私が神さまに愛されているからです。主イエスがわたしのために死んでくださったからこれをするのです。」そう言えるような恵みの御言葉が、私達の生活に食い込んでくるようになるということです。

そうしてどうなるのか？エフェソ書にはこうあります。「あなたがたは神に愛されている子どもですから、神に倣う者となりなさい。キリストが私達を愛して、ご自分を香りのよい供え物、つまり、いけにえとして私達のために神にささげてくださいましたように、あなたがたも愛によって歩みなさい」(エフェソ5:1から2)。神に倣う者になるということです。

困難を耐え忍ぶことは、苦しいことです。しかし、この苦しみを通じて私達はキリストの刻印を受け、神に倣う者とされていく。神に倣う者とは、途方もないこと。しかし、とんでもなくはない。なぜなら、それほどに私達は神に愛されているのです。

だからこそ、希望が生まれるのです。自分の力で変わるしかないのであれば、そこに、希望は生まれようがありません。ですが、私達が受ける刻印は、神の愛による刻印です。恵みの刻印です。御子の命を懸けた神の愛が注がれる者としての刻印を、忍耐を通して私達は受けるのです。だから、そこに、私達の希望があります。私達は今、恵みの入口に立っています。今までキリストの恵みに生きてきた人々も更にそれを上回る恵みへの入口です。このドアをあけていきたいと願います。苦しい時こそ、神に向かってキリストに向かって自分を開き、神を受け入れ、キリストの刻印を押して頂きましょう。キリストこそ、その血をもって私達と神の間に平和の道を開いてくださったのだから。恐れず、神を喜んで生きていきたいと切に願います。

11 苦難を喜ぶ

最後に。先ほど礼拝で賛美した「我が主イエスよ、ひたすら」という讚美歌を愛した二見美枝姉の話をしたと思います。二見姉妹は信仰歴は長い方でしたが、決して目立つ人ではありませんでした。淡々と礼拝を守り、縁の下の力持ちとして教会に仕えた方でした。教会の前の花壇には、二見姉が植えた植物がいまも季節ごとに綺麗な花を咲かせます。

そんな二見姉にも大きな試練がありました。B型肝炎です。二見姉妹にはなんの落ち度もないのに、かかってしまった辛い病。「どうして私が…」と思わなかったことはないでしょう。眠れぬ夜もあったと思いますし、苦しみ悩んだと思います。しかし、二見姉は、その苦しみをイエス様と共に耐え忍ぶことで、イエス・キリストをより深く知り、恵みの刻印を押して頂き、そして自分を変えて頂いたのではないのでしょうか。二見姉妹の地上での一生は、人生の悲喜こもごもの出来事を通じて、キリストの愛に生かされ、キリストへの愛に希望をもって生きた日々であったと思います。そうでなければ、「来たれ、来たれ、苦しみ。うき悩みもいとわじ」という歌詞の「わが主イエスよ、ひたすら」という讚美歌を愛することはなかったはずです。

このような信仰者の後に続いて、私どもも恵みの刻印を受けた者として生きていきたいと思えます。そして、まだキリストを知らない人々、自力で人生の苦難と戦っている一人でも多くの人に、キリストにあって苦しみ生きる喜びを伝えていきたいと願います。なぜでしょうか。「それは、私が神さまに愛されているからです。主イエスがわたしのために死んでくださったからです。」と答えられるように恵みの中に立っていきましょう。私達の傍らで主イエスが支えてくださいます。